

東日本大震災救援募金会計 総額 1,262,783,828 円

国内 891,564,184 円 海外 371,219,644 円 2014 年 8 月 31 日現在

東日本大震災救援対策委員会会計、
東日本大震災救援対策本部会計中間収支計算書（単位：円）

	総合計
	2011 年 3 月 12 日 ～ 14 年 8 月 31 日
【収入の部】	
繰 入 金	50,000,000
海外募金収入	371,219,644
国内募金収入	891,564,184
集会等参加費	429,327
雑収入	239,195
繰入金収入	205,700,000
長期借入金収入	370,000,000
長期貸付金回収収入 *1	119,453,629
当年度収入合計 (A)	2,008,605,979
前期繰 越 収支差額	
収 入 合 計 (B)	
【支出の部】	
救 援 金 *2	225,784,110
会堂牧師館再建補助金	465,648,429
見 舞 金	1,943,000
委 員 会 費	7,710,585
渉 外 費	1,771,904
人 件 費	87,989,860
事 務 費	65,279,323
活 動 費	14,470,185
車 両 費	12,006,169
建 物 費	13,241,982
繰入金支出	205,700,000
長期貸出金支出 *3	557,856,129
積立て預金支出	50,767,539
救援対策基金戻入金	50,000,000
長期借入金返済支出 *4	150,000,000
当年度支出合計 (C)	1,910,169,215
当年度収支差額 (A)-(C)	98,436,764

* 1 長期貸付金回収収入
(会堂牧師館再建貸付返済金)

2014.7.31	郡山細沼教会	1,300,000
-----------	--------	-----------

* 2 救援金

2014.7.2	2014 年 8/18 ～ 20 福島県郡山市周辺の子どもたちを茨城県常総市「あすなろの里」に招くスマイルキャンプ 支援金	500,000
2014.8.22	7/22-24 こひつじキャンプ (妙高高原)	53,770

* 3 長期貸付金支出

2014.7.1	会堂牧師館再建支援金会計から同貸付金会計へ(内部貸付)	90,000,000
2014.7.16	福島教会貸付	20,000,000
2014.7.17	三春教会貸付	300,000

* 4 長期借入金返済支出

2014.7.1	計 8000 万円を、各会計に返済：経常会計 2500 万円、内外協力資金 2300 万円、会堂貸出金 3200 万円	80,000,000
----------	---	------------

東日本大震災緊急救援募金・東日本大震災救援募金教区別集計表（単位：円）
【2011 年 3 月 15 日～ 2014 年月 8 月 31 日】

教区	件数合計	金額合計
北海	154	6,394,128
奥羽	182	6,962,967
東北	87	3,530,427
関東	1068	64,343,197
東京	2023	224,896,701
東京教区	17	5,217,591
東京・東	340	32,503,652
東京・西南	546	86,396,797
東京・南	206	34,533,503
東京・北	357	26,835,779
東京・千葉	557	39,409,379
西東京	876	86,321,024
神奈川	686	58,849,212
東海	658	191,431,110
中部	736	74,414,319
京都	102	10,494,040
大阪	551	38,574,084
兵庫	119	10,800,220
東中国	127	6,971,642
西中国	214	8,414,195
四国	419	19,958,872
九州	426	21,273,837
沖縄	116	2,670,271
個人・他	1,288	55,263,938
総計	9,832	891,564,184

ハートフル釜石開所式

2014 年 10 月 7 日（火）教団の支援活動センター「ハートフル釜石」の開所式が、岩手県釜石市定内町に借りた新たな拠点となるマンションの一室で行われた。開所式の司会進行は飯島幹事、感謝礼拝の司式と説教を私が行った。集まってくださったのは、「お茶っこサロン連絡会」関係者の皆さん。釜石市の社会福祉協議会から 3 人、カリタス釜石（カトリック）などキリスト教支援団体から 3 人、曹洞宗の住職、岩手生協、ハートフル釜石から佐々木むつ子氏、新生釜石教会から柳谷雄介牧師と信徒など 13 人であった。釜石市社会福祉協議会会長の丸木久忠氏から祝辞を頂戴し、会食、懇談と良い時を持った。

これまで、教団は岩手県における支援センターを遠野に置いていたが、活動現場は 40 キロ離れた釜石市であったので、不便であり、移転を望んでいた。今回、機が熟して移転となったが、「お茶っこ」中心の活動内容が変わるわけではない。

震災後 3 年半たって、支援活動団体が次々と撤退していく中で、我々がセンターを新しく釜石に置くのは注目されるであろう。また、スタッフを二人増やし、専従者を一人入れることになるので、責任が重くなる。中・長期の支援活動を作っていく中で、神の導きを祈ります。

伊藤瑞男（救援対策室長）

日本基督教団

東日本大震災救援対策本部ニュース Vol. 15

2014 年 10 月 11 日発行

169-0072 東京都新宿区大久保 1-7-18-4F T/F 03-3205-6088 救援対策本部長 石橋秀雄

つなげよう、
つながろう
復興支援！



わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。（マタイ福音書 25 章 40 節）

日本キリスト教社会事業同盟（社事同）は、キリスト教精神を理念として社会事業を実践する法人・個人を会員とする団体です。2011 年 3 月 11 日午後は、浜松のホテルで社事同理事会を開催中でした。大きな揺れを感じ、何もわからぬままに早々に会議を解散しました。それが東日本大震災だったのです。

震災直後会員は、それぞれのルート・方法によって復興支援活動をしていました。6 月の社事同総会にて、復興支援スタッフ派遣に対する復興支援諸経費助成制度を作ってから、社事同としての活動を本格的に開始しました。

今日までの支援活動は、仙台にある全国コミュニティーライフサポートセンター（CLC）の傘下にて、車輛持込みによる救援物資の輸送と避難所へのボランティア送迎、岩手県大槌町への支援スタッフ派遣をし、災害避難所の閉鎖後は、福祉専門職（看護職・介護職等）を施設・事業所、石巻開成住宅「拠り所あがらいん」と日本基督教団「ハートフル遠野」に派遣しました。南相馬市にある障がい者事業所には、3 カ月交替で 4 人の会員事業所職員を派遣することもしました。

今年 6 月、宮城学院大学とカトリック元寺小路教会を会場に、「被災地に学ぶ」と題して、日本キリスト教社会福祉学会と 21 世紀キリスト教社会福祉実践会議（エキュメニカルな集会）が 2 日続きで開催されました。この 2 日間、被災地から発信されたレポートを聞いた参加者の一人は、「震災について共に考えるとはどういう事か、改めて問い直す時でありました。そして、3 年が過ぎた今だからこそ新たな問題のあることを知りました」と話しています。また、南相馬の現状について、障がい者事業所の施設長からは、「福祉現場は言うまでもありませんが、多くの会社やお店も人手不足、働き手の年齢も高く深刻です。生活基盤がまだまだ不安定、今後、心のケアが重要となる中、『安全』『安心』な『当たり前』の生活を求めています」という切実な声が届きました。3 年間継続して支援してきた石巻開成住宅「拠り所あがらいん」からの「慣れたスタッフを派遣してほしい」との要望に応え、これまでの経験と人間関係で信頼されている方を支援スタッフとして派遣しました。これらのことは、同盟ニュース 28 号（2014 年 9 月）に掲載しています。

震災から 3 年 6 カ月が過ぎましたが、まだまだ支援が必要です。フクシマは原発事故が重なり、新たな問題を抱えつつ深刻な状況です。社事同は、これからも現地の声に耳を傾け、祈りつつ、福祉の専門職団体として支援を継続していきます。これからは、お互いに情報を共有し、発信して、総合力としての復興支援活動をしていくことが大切だと思います。「つなげよう、つながろう復興支援！」

日本キリスト教社会事業同盟

総幹事

平井 章



こひつじキャンプレポート

7月22日(火)～24日(木)に新潟県の妙高高原 YMCA ロッジで行われた第13回「こひつじキャンプ」に参加しました。これは教団東日本大震災救援対策本部が全国募金によって運営している放射能被害のある地域に住む子どもたちのための「短期保養プログラム」です。主に東京 YMCA のスタッフの皆さんに現地でのプログラム作りと運営を協力していただきながら、回数を重ねてきました。その内2回は台湾基督長老教会のお招きをいただいて、台湾において開催されました。

どの回でも、バーベキュー、ハイキング、川遊び、キャンプファイヤーなど、屋外で思いっきり遊ぶ体験を子どもたちにしてもらっています。

リポーター：大村 栄（救援対策本部広報担当・阿佐ヶ谷教会牧師）



今回は福島県内の福島市、郡山市、いわき市、白河市などから、4才から12才までの子ども19名、お母さん10名、合わせて29名が参加され、ほかにYMCAのスタッフ3名と教団から飯島信幹事と私が参加しました。夏休みとはいえず平日の開催だったため、今回はお父さんの参加はありませんでした。

夜に子どもたちが寝たあと、「リラックスタイム」という親たちが語り合う時間があります。そこでは放射能汚染に悩むお母さんたちが、胸の内の思いを吐露しておられました。聞き取ったそれらの言葉をここに記します。

「子どもに外遊びをさせる家とさせない家がある。うちではさせないから、外で遊ぶ友達の声聞いてもうちの子は出られない。親も子どもストレスをためきってる。次のこひつじキャンプまで我慢しなさいと言っている」。

「ある日、帰宅したら障子がビリビリに破れていた」。

「学校の体育館で遊ばせたいが、そこはスポーツ少年団に独占されている。少年団に入れると、どこで活動させられるか分からない」。

「学校のプールで子どもにラッシュガード（日焼け防止などに使うウェア）を着せたいと言ったら、医者診断書がないと駄目と先生に言われた」。

「震災直後から車で学校の送り迎えをしてきた。朝は集団登校をするようになったが、帰りだけは車で迎えている。かつて大勢の親たちがそうしていたが、いまは私だけ」。

「放射能の影響かどうか分からないが、子どもが何度も鼻血を出した。ごみ捨てにも行かせられなかった」。

「県は復興ムード一色だ。学校給食のコメや牛乳は福島県産安心のアピールに用いられている」。

「夫の実家（福島県内）の米を要らないと言ったら、それ以来関係が悪くなってしまった」。

「福島を離れた人も多いが、年寄りには動きたがらない。それを置いては行かない」。

「農村部は人間関係が濃いから、動きがとれない」。



「県外では福島ナンバーは差別されると聞いた」。

「去る勇気と、残る勇気とがある」。

「年間40日汚染のないところに行けば、子どもの体力は回復するそうだ。こひつじ（キャンプ）に期待している」。

「こひつじに来て土に触ろうとしている我が子に『待って!』と言いそうになった。ここでは大丈夫なんだった」。

「放射能を気にしている人と、そうでもない人とがいる。気にしている自分も、本当のことは分からない。いつまでこんな我慢を子どもにさせなければならないのか!」。

「こひつじに来ると私ははじける。地元では言えないことが、ここでは言える」。

「このキャンプにほかの人を誘っていいのかどうか迷う。相手が本当に子どもの保養を求めているのかどうかを見極めてからでないと」。

「ストレスで小学校は不登校だった。中学の入学式の直前に、迷ったが台湾でのこひつじキャンプに参加したら、リフレッシュできて中学校には通っている」。



このこひつじキャンプは毎回参加希望者が多く、5月に行った第11回は、30名の募集に対して97名の希望者がありました。今回の第13回こひつじキャンプは、第11回に参加できなかった親子のために急ぎょ開催したものでした。最後に、第13回こひつじキャンプに参加したお母さんが寄せて下さった感想文の一部を引用します。

■こひつじキャンプ妙高に参加させて頂いて

こひつじキャンプ妙高に参加させて頂きありがとうございました。川遊び、バーベキュー、ハイキング、ナイトハイク、そば打ち等々、楽しい時間の中で子どもも大人もみんなが打ち解け、とても楽しく温かいキャンプでした。

初めましての挨拶から2泊3日に、日頃できない草に寝転んだり、ハイキングの途中で巨大キノコや大きな毛虫に驚いたり、息子は最近始めたバドミントンを体育館の中でなくグラウンドで楽しみ、少しだけ雨に降られる気持ちよさも味わったようです。

グラウンド遊びのあと、息子たちが水道の水を飲んでいいのか迷っているのを見て、ここの水道の水は飲んでもいいよ、と言いながら、福

島でミネラルウォーターを飲むのが普通になっている息子が、福島の普通の日常と、本当の普通の日常はちょっと違うということを改めて確認するのがこのキャンプなのかなと思いました。

キャンプに参加して自然の中で思いっきり遊ぶことを楽しみに、制約の多い福島の日常を頑張っている子どもたち、その子たちがキャンプで遊ぶのを見ると親も頑張れます。

震災当時小学2年生だった息子は、公園や外遊びの楽しさを十分知っていました。今は6年生です。その間に、原発事故の影響に対する各家庭の考え方の違いで、公園で遊ぶ友達を羨ましく感じ、公園で遊ぶ計画に混ざれないことや遊べないことに苛立ち、でも心配している親に公園で遊びたいとは言えず、障子にシャープペンを刺し続けるようになってしまい、公園で遊ばせる選択をした時期もありました。

こひつじキャンプに参加させて頂くようになってから、障子に穴が開くことは全くありません。地元の公園で遊ぶこともなくなりました。今、福島で少数派となりつつある原発事故の影響をまだ心配している親子にとって、こひつじキャンプは大きな力です。

世界中で大変なことが起こっている中で、こひつじキャンプをずっと継続してくださいとお願いすることは難しいことなのかも知れませんが、今後益々、「まだ心配してるの?」と言われる親子が、こひつじキャンプでリフレッシュできたら本当にありがたいです。

こひつじキャンプで元気にももらった息子たちが成長して、今度は別の子どもたちを元気づけるお手伝いができたらと想像します。(M・S)